
 学 会 記 事

第 25 回リバーカンファレンス総会

日 時 平成 13 年 3 月 17 日 (土)
9 時 30 分～
会 場 新潟ユニゾンプラザ
大会議室

I. 一 般 演 題

1 被膜下出血を来した乏血性肝細胞癌の一例

森 茂紀・柏村 浩・柳沢 善計
村山 久夫・石川 卓*・早見 守仁*
野本 実**

信楽園病院内科
同 外科*
新潟大学第三内科**

症例は 69 才男性。腹痛を主訴に来院し入院。腹部超音波検査で肝 S8 に肝細胞癌を疑う腫瘤を認めた。造影 CT では辺縁にわずかに造影効果があるのみで乏血性であったが、肝被膜下に小出血を来していると考えられたため、緊急血管造影検査及び肝動脈塞栓術を施行した。このときの CTangiography でも周囲の区域性淡染帯を除き主腫瘍部は乏血性であり、肝細胞癌との術前診断は困難であった。その後肝右葉切除、リンパ節転移 (13a) 切除を施行したが、組織診断は強い壊死傾向を伴う低分化型肝細胞癌であった。術前診断が困難であった点と、被膜下に小出血を来したと考えられることから、稀な症例と考え報告する。

2 肝細胞癌脾転移の破裂に対し TAE を行った一例

白井 大悟・時光 善温・窪田 智之
内藤 彰・藤原 敬人・山崎 国男
青野 高志*

新潟県立中央病院内科
同 外科*

3 自己免疫性肝炎に異時性多発性肝細胞癌を生じたと考えられる一例

山崎 和秀・本間 信之・須田 剛士
本間 照・高橋 達・野本 実
市田 隆文・青柳 豊・朝倉 均

新潟大学第三内科

4 自然退縮と思われる経過がみられた原発性肝癌の一例

太田 宏信・丸山 弦・馬場 靖幸
林 俊壺・吉田 俊明・上村 朝輝
茂古沼達之*・武田 敬子*

済生会新潟第二病院消化器科
同 放射線科*

症例は 64 歳、男性。肝硬変 (B + C 型) にて経過観察していたが、1997 年 3 月 S5 に HCC が出現し治療を開始。その後 S4 にも出現し、SMANCS 動注を計 4 回 (2 回 TAE を併用)、PEIT1 回を行った。2000 年 6 月 S4 に再発を認めたが肝動脈は閉塞し IVR 治療が不可能となったため同年 9 月より UFT-E 顆粒を 1 ヶ月内服した。同年 11 月全身浮腫、肺転移で入院。対症療法のみであったが原発巣および肺転移も縮小。腫瘍マーカーも AFP が 98091 → 5526ng/ml, PIVKA-II が 47357 → 5783mAU/ml まで減少した。自然退縮も考えられたが、経過からは UFT-E 顆粒の効果と思われた。